

新 おおさか KEYワード【第25回】

展覧会での実験もおもしろく 文化芸術の発信拠点・中之島を探る

ネオ・ルネッサンス様式を基調とした美しいデザインで中之島に建つ大阪市中央公会堂。株式会社仲買人の岩本栄之助の寄付で建設され、大正7(1918)年にオープンしたが、設計は、最終的に13名が参加した設計競技(コンペ)で決定された。

第一位に選ばれたのが、歌舞伎座や琵琶湖ホテルを設計した岡田信一郎の案で、設計競技には武田五一、長野平治、伊東忠太、矢橋賢吉、大江新太郎、田辺淳吉、宗兵衛、中條精一郎も参加した。

現在の公会堂とは異なる別の設計案が、他に12案も存在したのである。もしも、他の案が採用されていたら現在の大阪風景はどうなっていたのだろうか。そんな興味が湧いてきた。

土佐堀川と堂島川に挟まれた中之島は、古くから大阪の発展と密接に関係している。江戸時代は諸藩の蔵屋敷が並んで、米や各地の名産品が集積し、近代では、大阪市役所や日本銀行大阪支店、大阪府立中之島図書館をはじめ、朝日新聞社や新大阪ホテル(現リーガロイヤルホテル)などが集中し、大阪のシビックセンター(都市機能の集中した地域)へと成長した。

今年は大阪中之島美術館がオープンして、中之島付近がにぎわっている。大阪大学も大阪大学中之島センターの改修工事中で、美学、美術史、演劇学、音楽学、文芸学など芸術系の拠点として「大阪大学中之島芸術センター(仮称)」の2023年開設をめざしている。

大阪都心においてホットな地域が中之島だ。あらためて中之島の歴史と重要性を見直したい。そこで現在、大阪大学総合学術博物館では、私の企画で第16回特別展「モダン中之島コレクション—“大大阪”時代の文化芸術発信センター」を開催している(今年度で私は定年なので、在職中、最後の企画展覧会である)。

中之島に関する絵画や地図、パンフレット、小説などを並べたほか、旧・大阪市庁舎のステンドグラス(大阪くらしの今昔館所蔵)や朝日新聞・朝日ビルディング・朝日会館の建築模型(竹中工務店所蔵)、安井曾太郎《薔薇図》(株式会社ロイヤルホテル所蔵)などが出品されるほか、公会堂のコンペ案



展覧会風景。朝日新聞・朝日ビルディング・朝日会館の建築模型(竹中工務店所蔵)

として提出された武田五一(1872~1938)と矢橋賢吉(1869~1927)の透視図2案(大阪市所蔵)も展示した。



武田五一のコンペ案、大阪市所蔵。建っていたらこれはこれでおもしろい。

透視図で見ると、大阪市立美術館にも関与した武田

五一の案は、建築正面に5個所の扉を設けて、市民を迎え入れるような正面性の強調された建物であり、矢橋の案は二つの大きな塔が特徴的で、大正13(1924)年、福島県郡山市に矢橋が建設した同市の公会堂に通じるものがある。

これらの案が採用されていたら、中之島付近の街の雰囲気も違ったものになっていただろう。大正末昭和初期に付近に建てられた建築や境界の都市景観にも、今とは異なる印象を生み出したかも知れない。

色彩やスケール感など、まだまだ改善の余地があるが、そんな思いがたつって展覧会では、本紙表紙のように現在の風景とコンペ案の外観図をいくつか組み合わせた画面を、スライドショーで見ることができるようにした。タイムマシンで別の過去に戻るような、パラレルワールド(並行世界)を可視化する実験だ。過去への郷愁よりも別の未来があった可能性を夢想し、明日の大阪のあり方に生かしたいという気持ちが強い。

夏も近く日没が遅くなり、美術館帰りに中之島を歩いていると、あったかも知れない別の世界、「幻想」の公会堂が、黄昏の遊歩道のむこうに浮かんでいる気がはじめた。私自身、このプロジェクトに入れ込んでいる訳ですが、百聞は一見にしかず、展覧会場でこの不思議な風景をお楽しみください。

特別展「モダン中之島コレクション」は大阪大学総合学術博物館(阪急・石橋阪大前駅)で7月30日まで。入館無料、日曜・祝日休館、開館時間10時30分~16時30分(入館16時まで)。シンポジウム、ミュージアムレクチャーは博物館ホームページをご参照ください。

筆者プロフィール 橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ—増殖するマンモス/モダン都市の現象—」(創元社)など。